特集

日本風工学会 40 周年記念

日本風工学会誕生の頃

The Early Days of Japan Association for Wind Engineering

伊藤 學*

Manabu ITO

私が初めて風工学分野の活動に加わったのはほぼ半世紀前の 1967 年、オタワにおける 2nd International Seminar on Wind Effects on Buildings and Structures への参加であった。大学院から助教授時代初期にかけての私の研究テーマは吊橋の振動とは言っても走行荷重を対象としたものであったが、1964 年、私の上司、平井 敦教授の念願叶って全径間橋梁模型用大型風洞が東大橋梁研究室に設置されるに及び、私もそちらの研究グループに加わった。平井先生は戦時中の 1940 年末、ニュース映画で旧タコマ橋落橋のシーンを見て、いち早く吊橋の耐風安定性の研究に着手されたという、この分野の世界的パイオニアであった。橋梁風荷重の研究は既に 19 世紀末の英国フォース鉄道橋の設計時に手がけられていたが、国際交流の本格的スタートは 1963 年、上記オタワ会議と同じテーマの第 1 回国際会議の英国での開催であった。4 年毎開催となったこの会議の第 3 回は 1971 年、平井先生が組織委員長、私が幹事を務め、東京に招致された。この会議が風工学と名を改め、Wind Engineering が正式に誕生したのは、1979 年コロラドでの第 5 回会議からであった。

翻ってわが国では、上記東京での国際会議を契機に土木・建築分野を中心にこの分野の学際協力が進み、1976 年にはわが学会の前身である“日本風工学研究会”が設立された。日本風工学会と名を改めたのは 1982 年であるが、研究会設立から学会当初の 4 年間、計 10 年間の会長を建築の石崎澁雄先生（京大防災研教授）が務められた。第 2 代会長はその後 3 期 6 年間、当初から理事であった私が

務めた。すなわち私もこの学会の設立者の一人であったが、当初から今と同じく、土木、建築分野のほか、電力、流体、気象など幅広い分野の方々に加わっていただいた。風工学の特徴はきわめて学際的であり、かつ対象が自然災害のような負の側面だけでなく、風力エネルギーの利用、住環境の改善といった益の面も併せ含んでいることであろう。ただ、構造技術者にとって構造工学のみならず流体、気象といった知識が必要であるため、敷居の高さを感じる方もおられよう。

ともかく、わが国では台風、突風、季節風による自然災害が問題になることが多い。戦後しばらくして長大橋、高層ビルの建設が盛んになった状況下で学会設立当初から風工学研究は隆盛を極め、研究者数、発表論文数、風洞などの研究設備も増加の一途をたどった。その結果、学会活動レベルが他の先進諸国と較べても高かったと自負できた。BBAA や CWE のような新しい国際的活動も日本がリーダーシップをとってきたことは誇れる成果であった。最近の海外事情は詳らかでないが、充実した内容の季刊会誌を半世紀近くにわたって出し続けている国は他にあるだろうか。ただ、最近の会員数の漸減傾向はいささか気になる。私ども橋の分野では長大スパンの建設が今世紀に入って急減したという事情もあるが、科学技術の目覚ましい発展によってさまざまな道具立てを手にすることができるようになった今、先見性を持って新たな課題に取り組む努力が必要ではなかろうか。

* (一財) 橋梁調査会理事長
President, Japan Bridge Engineering Center
東京大学 / 埼玉大学 名誉教授
Professor Emeritus, The University of Tokyo/ Saitama University

日本風工学会 名誉会員・元会長
Honorary Member and Former President, JAWE